

古事記から学ぶ その2
天神の出現から伊邪那岐神・伊邪那美神の別離まで <まとめ>

高天原に最初に出現した三神

=●天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ):天の中央にあって宇宙を統一する神

=●高御産巢日神(たかみむすびのかみ):宇宙の生成を司る神

=●神産巢日神(かみむすびのかみ):宇宙の生成を司る神

天と地のけじめがつかず形らしい形もない地上は、水に脂を浮かべたように漂い、あたかもクラゲが海を漂うような状況だった。そこに水辺の葦が芽吹いてくるように萌え上がっていくものがあり次に現れた神は

=●宇麻志阿斯訶備比古遲神(うましあしかびひこぢのかみ)

葦の芽が天を指す勢いを示す男神

=●天之常立神(あめのとこたちのかみ)

永遠無窮の「天」そのものを神格化した神

漂う脂のようなものの中から

生まれるべき「地」を神格化した神の出現

=●國之常立神(くにのとこたちのかみ)・

=●豊雲野神(とよくもののかみ)

脂のようなものが次第に凝り固まり、広々とした沼のようになり

=●宇比地邇神(うひぢにのかみ)男神

=●須比智邇神(すひぢにのかみ)女神

脂のように漂うものの中から潮と土が分かれ始めて、砂や泥が混じった沼となった沼地の泥が次第に固まり、春の芽吹きが育って

=●角杙神(つのぐひのかみ)男神

=●活杙神(いくぐひのかみ)女神。

広やかな大地がここに固まった

=●意富斗能地神(おほとのぢのかみ)・・・男神

=●大斗乃弁神(おほとのべのかみ)・・・女神。

大地の面が不足なく整った

=●淤母陀琉神(おもだるのかみ)・・・男神

=●阿夜訶志古泥神(あやかしこねのかみ)・・・女神

この時に「あやにかしこし」とあげたよろこびの声を神格化したものそしてその次に現れたのが

=●伊邪那岐神(いざなぎのかみ)・・・男神

=●伊邪那美神(いざなみのかみ)・・・女神

→ ここまでを
天神(あまつかみ)と言う

ここまでを
神代七世(かみよななよ)と言う

伊邪那岐神・伊邪那美神が生んだもの(神産み)

最初に高天原に出現した三神は、伊邪那岐神・伊邪那美神に命題を与えた。

「地上はまだ脂のように漂っているばかりだ。お前たちは人が住めるように作り上げよ」

●伊邪那岐神(イザナギノカミ) = ●伊邪那美神(イザナミノカミ)

伊邪那美命が先に「あなにやしえおとこを(なんと見目麗しい人でしょう)」と感嘆し、次に伊邪那岐命が「あなにやしえおとめを(なんと見目麗しい乙女でしょう)」と感嘆した。

伊邪那岐命は、「女の方が先にものを言ったのは良くないしだ」と小言を言いはしたが・・・

=第一子(蛭子:蛭のような子)・・・葦船に入れて流し去った

=第二子(淡島)・・・「軽んじて憎む」という意味からつけられた名前、御子としては数えない

高天原の神に相談したところ、手順の誤りを指摘されたので、今度は正しい手順で行った結果

=●淡路之穂之狭別島(あわじのほのさわけしま)・・・のちの淡路島を神格化

=●伊予之三名島(いよのふたなのしま)・・・のちの四国

四つの顔を持つ ○愛比売(えひめ)

○飯依比古(いよりひこ)

○大宜都比売(おおげつひめ) ○建依別(たけよりわけ)

=●隠岐之三子島(おぎのみつごのしま)・・・のちの隠岐の島

別名 天之忍許呂別(あめのおしころわけ)

=●筑紫・・・のちの九州

四つの顔を持つ ○白日別(しらびわけ)=筑紫 ○豊日別(とよびわけ)=豊(豊前・豊後)

○建日向日豊久士泥別(たけひむかひとよくじひねわけ)=肥(肥前・肥後)

○建日別(たけびわけ)=熊襲

=●天比登都柱(あめのひとつばしら)・・・伊伎(壱岐)

=●天之狭手依比売(あめのさでよりひめ)・・・津島

=●佐度の島・・・佐渡

=●大倭豊秋津島(おおやまととよあきつしま)・・・本州

別名 天御虚空豊秋津根別(あめのみそらとよあきづねわけ)」

=●建日方別(たけひがたわけ)・・・吉備の児島(現在の児島半島らしい)

=●大野手比売(おおのでひめ)・・・小豆島

=●大多麻流別(おおたまるわけ)・・・大島(場所が特定できていない)

=●天一根(あめひとつね)・・・女島(ひめじま・五島列島の南西にある男女群島と思われる)

=●天之忍男(あめのおしお)・・・知訶島(ちかのしま・五島列島の値嘉島と言われている)

=●天両屋(あめのふたや)・・・両児島(五島列島説と瀬戸内説があるらしい)

国を生む仕事はここで一段落して、次に様々な神を産み出した。

●伊邪那岐神(イザナギノカミ)=●伊邪那美神(イザナミノカミ)

=●大事忍男神(おおことおしをのかみ)・・・大事が終わったことを称えた神
次に生んだのが、家屋を守護する六つの神

=●石土毘古神(いはつちびこのかみ)・・・壁や石や土を称えた神

=●石巢比売神(いはすびめのかみ)・・・石砂を称えた神

=●大戸火別神(おほとびわけのかみ)・・・入口の門を称えた神

=●天之吹男神(あめのふきをのかみ)・・・屋根をふくことを称えた神

=●大家毘古神(おほやびこのかみ)・・・屋根を称えた神

=●風木津別之忍男神(かざけつわけのおしをのかみ)・・・風害を防ぐ神
次に生んだのが、

=●大綿津見神(おおわたつみのかみ)・・・海を統(す)べる神

次に生んだのは、水戸(みなと)や河口を統べる神

=●速秋津日子神(はやあきづひこのかみ)

||

=●速秋津比売神(はやあきづひめのかみ)

=●沫那芸神(あわなぎのかみ)・・・水泡の和ぎわたったことを示す

=●沫那美神(あわなみのかみ)・・・波の立ち騒ぐことを示す

=●頬那芸神(つらなぎのかみ)・・・水が泡立つ様を示す

=●頬那美神(つらなみのかみ)・・・同上

=●天之水分神(あめのみくまりのかみ)・・・灌漑を司る神

=●國之水分神(くにのみくまりのかみ)・・・同上

=●天之久比奢母智神(あめのくいざもちのかみ)・・・同上(柄杓の意)

=●國之久比奢母智神(くにのくいざもちのかみ)・・・同上

=●志那都比古神(しなつひこのかみ)・・・風の神、息の長いことを示す

=●久久能知智神(くくのちのかみ)・・・木の神、茎を美化した

=●大山津見神(おおやまつみのかみ)・・・山の神

||

=●鹿屋野比売神(かやのひめのかみ)・・・野の神、屋根をふく萱・薄を称えた
別名 野椎神(のづちのかみ)

=●天之狭土神(あめのさづちのかみ)・・・険しい坂道を司る神

=●國之狭土神(くにのさづちのかみ)・・・同上

=●天之狭霧神(あめのさぎりのかみ)・・・峠の境界を司る神

=●國之狭霧神(くにのさぎりのかみ)・・・同上

=●天之閭戸神(あめのくらどのかみ)・・・日の射さない谷間を司る神

=●國之閭戸神(くにのくらどのかみ)・・・同上

=●大戸惑子神(おおとまといこのかみ)・・・山の緩やかな斜面を司る神

=●大戸惑女神(おおとまといめのかみ)・・・同上

=●鳥之石楠船神(とりのいわくすぶねのかみ)・・・交通を司る神、別名 天鳥船(あめのとりふね)
水鳥のように速く進む楠で造った船を称えた神

=●大宜都比売神(おおげつひめのかみ)・・・食物を司る神

=●火之野芸速男神(ひのやぎはやのかみ)・・・火の神

別名 日之炫毘古神(ひのかびこのかみ)・火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ)

火の神を生む時に伊邪那美神は女陰にやけどを負い、患って床に就いてしまった。

→伊邪那美神の「嘔吐」=●金山毘古神(かなやまびこのかみ)・・・鉾山を司る神

=●金山毘売神(かなやまびめのかみ)・・・同上

→伊邪那美神の「糞」=●波邇夜須毘古神(はにやすびこのかみ)・・・肥料を司る神

=●波邇夜須毘売神(はにやすびめのかみ)・・・同上

→伊邪那美神の「尿」=●弥都波能売神(みつはのめのかみ)・・・耕地を灌漑する水を司る神

=●和久産巢日神(わくむすびのかみ)・・・穀物の成育を司る神

└─●豊宇気毘売神(とようけびめのかみ)・・・多くの食物を司る神

伊邪那岐神と伊邪那美神が生み出した島数は14、神の数は35になった。

伊邪那美神は、火の神を生んだ時の傷が元で、この世を去り、黄泉国(よもつくに)へ旅立った。

伊邪那岐神は悲嘆にくれて・・・

→伊邪那岐神の「涙」=●泣沢女神(なきさわめのかみ)・・・天香具山の裾の木の下にいた。

奈良橿原市にある香具山の北西麓にある畝尾都多本(うねをつたもと)神社に、泣沢という井戸を御神体とした境内末社が祀られている。

伊邪那美神の亡骸は、出雲国と伯耆国の県境にある比婆之山(ひばのやま)に埋葬された。

「比婆之山」は広島県と島根県の県境にある比婆山(ひばやま・1299m)とする情報が有力らしい。

伊邪那岐命は十拳剣(とつかつるぎ)を抜き、火の神(火之迦具土神)の首を切り落とした。

その十拳剣(とつかつるぎ)から

→剣先から落ちた血が流れた石の上から生まれた神

└=●石拆神(いはさくのかみ)・・・刀剣を鍛える時の石鎚を称える神

└=●根拆神(ねさくのかみ)・・・同上

└=●石筒之男神(いはつつのをのかみ)・・・同上

→剣の鍔際に就いた血も累々と横たわる石の上に流れて

└=●甕速日神(みかはやびのかみ)・・・刀剣を鍛える時の火の働きを称える神

└=●樋速日神(ひはやびのかみ)・・・同上

└=●建御雷之男神(たけみかづちのをのかみ)・・・同上

→剣の柄に集まった血は、指の股から滴り落ちて、

└=●閻淤加美神(くらおかみのかみ)・・・雨を司る神で、清冽な谷間の水を司る水神

└=●閻御津羽神(くらみつはのかみ)・・・同上

殺された火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）の

- 切られた頭 = ●正鹿山津見神（まさかやまつみのかみ）：山の険しい頂を称えた神
- 胸 = ●淤滕山津見神（おどやまつみのかみ）：山のふもとを称えた神
- 腹 = ●奥山津見神（おくやまづみのかみ）：深山を称えた神
- 陰処 = ●闇山津見神（くらやまつみのかみ）：暗い谷間を称えた神
- 左手 = ●志芸山津見神（しぎやまつみのかみ）：鬱蒼たる樹木を称えた神
- 右手 = ●羽山津見神（はやまつみのかみ）：麓の山を称えた神
- 左足 = ●原山津見神（はらやまつみのかみ）：なだらかな峰を持つ山を称えた神
- 右足 = ●戸山津見神（とやまつみのかみ）：端にある山を称えた神

伊邪那岐命が手にした十拳劍（とつかつるぎ）は、天之尾羽張（あめのおわばり）
またの名を伊都之尾羽張（いつのおわばり）と言い、鋭利な名刀の意味を持つ。

さて、次に何が起きるのだろうか？

伊邪那岐命は伊邪那美命の仇討ちをして一段落したものの、伴侶を失った悲しみはいえず、日を追って悲しみは深まるばかり。

意を決して、伊邪那美命との再会を願って黄泉国へ足を踏み入れるのだが、そこで見たものは……

以上